
ベラドンナの憂鬱

ふとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベラドンナの憂鬱

【Nコード】

N8106K

【作者名】

ふとん

【あらすじ】

あるところに、美しいお姫さまがいました。

黒い髪、白い肌、その姿はまるで大輪のバラのよう。

その美貌を人々はひれ伏すように讃えます。

しかしあまりに美しく賢いお姫さまは、こう呼ばれておりました。

ベラドンナ。

毒の実をつける花の名前です。

口さがない者は魔女とまで呼ぶ始末。

そんなお姫様が出会ったのは、とんでもない王子さまでした。

その報告をもってきたのは、顔の知らない王家の使者だった。

——王子が、婚約破棄をしたい、と。

つまり、こちらから公的に王子をつって欲しいという申し出だ。そんな馬鹿なことを、何を突然、と両親は騒ぎ立てたが、当の本人、ベラドナは思っていたほどの衝撃もなく、軽い脱力感が胸の中をずとんと落ちただけだった。

ベラドナの家は古くから王家に仕えてきた名門中の名門だ。

王の相談役も務めた人物も輩出した文官の家でもあり、大きな戦争で多くの功績を上げた優秀な軍人も世に送り出している。

現在も元老院に発言権を持つ、泣く子も黙る大貴族である。長いその歴史の中で過去に何人もの妃を送り込み、王家との繋がりも深い。

そういう家柄であつたから、長女であるベラドナが年頃の王子の妃候補に選ばれるのは至極当然の流れでもあつた。

口々に使者へと文句を浴びせる両親を尻目に、ベラドナは鷹揚に言葉を投げる。

「ぜひ、王子にお会いしたいわ。よろしいですわよね？」

につこりと微笑んでみせたにも関わらず、使者は真つ青な顔で彼女に肯いた。

まったく、失礼なことだ。

2 ベラドンナという姫

ベラドンナ・ディ・ラマンカは、美しい姫だ。

漆黒に濡れた長い髪、乳白色の柔らかな白い肌、その美貌は神さ
え誘惑するともいわれるほど、甘く艶めいている。

薄青の絹を幾重にも丁寧を重ねたドレスを纏い、手入れの行き届
いた庭園の椅子に腰かけるさまは、一枚の絵画のようだ。

しかし、しどけなく足を組み、寛いでいるようにも見えるとい
うのに、その華奢な背はピンと硬く伸びている。

ベラドンナと初めて対峙する者は、大方その迫力に圧倒された。

見た目には細い印象だが、彼女は背の低い方ではない。そしてそ
の上背から艶然と微笑みかけられると、凄絶な美貌も相まって、ま
るで自分が彼女の従順なしもべになったかのような気分陥る。大
貴族の姫ということもあり、実際に彼女にひざまずく者は多い。

誰もがこうべを垂れてしまう毒のような美しさ。

その薄い紫にけぶる瞳で見つめられれば、誰もが虜となる。

たおやかな彼女を人々はこう呼んだ。

ベラドンナ。

猛毒の実をつける花の名前である。

間違っではない、とベラドンナは思う。

文字でつづれば本名と読み方が少し違うだけなのだ。

「噂どおりに男たちを手玉にとるような、毒婦らしいことを一つも
したことはありませんのよ」

でも、と目の前で紅茶を飲む男に向かって微笑んだ。

「一度ぐらいはやってみてもいいのかもしれないわ。——例えば、その紅茶に毒を入れてみるとか」

「ごほ！」

目の前でまさに紅茶を飲んでいた男は目を白黒させて紅茶を嘔き出しかける。

常ならば、白い詰襟を着ていてそんな失態は犯さない男だが余程驚いたらしい。気管に入ったのか側付きの護衛官に背中をさすってもらっている。

情けなく咳きこむ姿を見ながら、未だ一口も飲んでいなかった紅茶にベラドナは口をつける。

アップルフレーザーの良い茶葉だ。ベラドナの好みの茶葉だった。世間というものは暇らしく、美しいという女に毒の名前であだ名をつけたと思えば、どこそこの貴公子を骨抜きにしたとか、夜ごと男を連れ込んでいる毒婦だとか、果ては姫に化けた魔女だという噂まである。

そんな噂の付きまとう姫を婚約者にしていたのだから、目の前の男はそれなりに胆力があつた。

今は涙目になって口をナプキンで拭っているが、陽光に映える美しい銀の髪に娘たちが嫉妬するような白い肌、華奢なイメージもあるが広い肩幅の美男子である。

ローラン王国の王位第一継承者、フレドリック・ローラン。

たった数日前までベラドナの婚約者だった男だ。

涙でうるんでいる碧眼を向けられれば、その肩書と美貌にどんな娘もたじろぐだろう。

「……お前が毒とかいうとシャレにならないぞ。ドナ」

「まるで昔とお変わりありませんのね。リック」

二人は幼馴染だ。

小さなころから目合わせて、将来は夫婦となるよう仕向けられていた。

きつと、それで良かったのだろう。

今までは。

「では、そろそろ紹介してくださらないかしら。あなたの婚約者を」
ベラドナは同じ席につきながら、先ほどから人形のように黙りこくった少女に目を向けた。

幾つか年下に見える少女だった。

赤に近い茶色の髪、同じような茶色の瞳。日に焼けた顔は太陽のようで、ベラドナから見れば子犬のようにも見える。

細い体に、お仕着せのようなドレスを着せられていた。慣れていないのは、一目瞭然だった。

「初めまして」

「はっはじめまして！」

ベラドナは小さな子供に向けるような、なるべく優しく見えるように微笑んだ。

すると少女はほっとしたように、笑顔をにじませた。

素直な少女だ。

「ベラドナ・ディ・ラマンカと申します。あなたは？」

「あ、あたし……いえ、私は、マーガレット・リリースといいます」
どぎまぎとしながら答える少女を、隣のフレドリックはハラハラしながら見つめている。

まるでベラドナがこの少女を取って食らってしまったかというようだ。

彼には妹がいるが、それでもこんなに心配そうな顔で見守っていることはない。

「お針子のお仕事をされているのですってね」

ベラドナがそう口にする、フレドリックは驚いたように碧眼を丸くした。

彼女の経歴を知る者はそういない。

表向きの経歴は、良家の遠縁なのだ。

フレドリックの動揺をよそに、マーガレットは穏やかに微笑んで、しかししっかりとした目でベラドナを見つめてうなずく。

「はい。城下町でお針子をしておりました」
誇りある者の瞳だ。

彼女は、仕事に誇りを持っている。
女の仕事は、そう多くない。

中には騎士団に入り、身を立てようとする者もいるが、それはほんの一握りのことで女の仕事はどれも下働きや男の手助けをするようなものが多い。

そんな中でもっとも一般的なのが、お針子だ。

孤児であろうと、お針子の師匠に雇ってもらえれば、自分で稼げる職業なのだ。

そして、マーガレットも例も洩れず、孤児ということだった。

「ここ何日か、針を持ってなくてちよつと不安なんです」

ベラドナは、彼女の茶色の瞳を見つめた。

良家の子女であろうと、意思の持てる女は少ない。

一国の妃になるということは、強い意志がなければならないのだ。

「……安心したわ」

「え？」

目を丸くするマーガレットにベラドナは、今度こそ微笑んだ。

「ドレスを一つ、作ってみたいの」

ベラドナの言葉に、今度はフレドリックが気色ばむ。しよせん庶民の娘だと、ベラドナが侮った言葉に聞こえたのだろう。この少女の前では百戦錬磨の王子も肩無しだ。それを内心、小馬鹿にしながらベラドナは続けた。

「わたくし、自分でドレスを作ってみたいの。よろしければ教えてください
くだらないかしら」

にっこりと微笑んだベラドナを驚いたように見つめたマーガレットだったが、やがて嬉しそうにうなずいた。

きっと、これから彼女たちには人並み以上の苦勞が付きまとうだろう。

だが、それでも大丈夫だ。

幸せそうに並んで歩く二人は、きっとこの国の希望となる。

ひとしきりお茶の時間を楽しんだが、これから花嫁修業があるというマーガレットに伴ってフレドリックも城の中へと帰っていった。ベラドナはゆったりと、ひとり残った庭園で紅茶を注ぐとポットに手を伸ばす。

「お注ぎいたしましょう」

メイドではない、低い声と共に大きな手がポットの取っ手をさらった。

見上げると背の高い男がゆっくりと紅茶をベラドナのカップに注ぐ。

くろがね色の髪は短いが尻尾のように一房だけ長く、ベラドナを見下ろす黒の双眸は鋭い。騎士の中でも護衛官だけに許された藍色の制服を着崩していて、見た目は城下町を闊歩するチンピラにも見えた。

「どういう風の吹きまわかしら。トトメス・ブレド」

トトメスはおどけるように首を傾げて「どうぞ」とポットをテーブルに置いた。

「リックのお守りはもういいの？」

「城の中に何人兵士がいるとお思いで？」

それでも、王子付きの護衛官が持ち場を離れることはごく稀だ。しかし、この男の意図が分かって、ベラドナは苦笑した。

「いいお嫁さんを見つけたわ、リックは。きっと幸せになる」

トトメスもまた、小さな頃から王子の側付きとして育った。だから、ベラドナとも幼馴染の間柄だ。

「次はあなたの番ね、トト。いい年頃なんだから早くお嫁さんを見つけることね」

「まるでドナは俺達の母親だな」

肩を竦めるトトメスを見上げ、ベラドナも呆れたように笑う。

「こんな大きな息子を持った覚えはないわ」

両親と弟が健在のベラドナと違い、フレドリックとトトメスに母はない。幼い頃、相次いで亡くなったのだ。そうしたことあつて、ベラドナは三人の中で母のようでもあり、姉のようでもあつた。

ベラドナが無骨な護衛官の注いだ紅茶に口をつけると、じっと彼女を見ていたトトメスは切れ長の双眸を少し伏せた。

「……悪かった。ドナ」

暖かい風が吹いた。

綻んだ花の香りも漂うようだ。

春は近い。

一年を通して気候の穏やかなローラン王国に、季節の感覚は薄い。だが、冬から春の変わり目に、花の兆しは確かにある。

穏やかなざわめきを心地よく受け止めて、ベラドナは微笑んだ。

「お前の幸せを、壊すつもりはなかった」

幸せ、だったのかもしれない。

王子の婚約者という立場は、確かに栄誉なものだった。

しかし、フレドリックは彼の幸せを見つけたのだ。

そして、ベラドナはその立場の喪失と同時に、その喪失感のあまりの軽さに驚いた。

己の歩もうとしていた人生の、あまりの安直さと軽さに。

見た目だけは派手な張りぼてのような婚約だった。

「トト」

これで良かったのだ。

「リックをこれからもお願いね」

美しく、ベラドナは春の日差しのように微笑んだ。

3 ベラドナの本当

それからは慌ただしく過ぎた。

王子の婚約破棄に始まり、突然現れた新たな婚約者。

国王と正妃は息子の幸せそうな様子に折れたらしい。彼らの結婚は瞬く間に決まった。恐らく王子の根回しが素早かったのだ。そういうことに長けた男だ。

最後まで王子と新しい婚約者との結婚に反対していたのは、ベラドナの両親ではなく、予想外にベラドナの二つ年下の弟だった。彼もまた、優秀な文官として城勤めをしているが、小さくはない発言権を持つ貴族だ。

ベラドナは久し振りに領地の屋敷に戻った弟と向き合いながら、首をかしげた。

「どうしたの。キール」

好きなニルギリの紅茶に口をつけようとしてもしない弟は、見た目にも重たい青を基調とした肘掛け椅子に腰をおろしたまま微動だにしない。

いつの間にか姉を追い越した背を姉同様にぴんと張り、若くして外交を任されている長官の長い上衣を身につけている。長めの髪は母親譲りの柔らかいブロードだというのに、底冷えのするような深い蒼の瞳が温かみ一切を払拭する。

内外から氷の長官と呼ばれる青年は、細い鎖のついた眼鏡の底から睨むように姉を見つめている。

元々整った容貌でもあるため、睨まれると海千山千の交渉官たちも震え上がるという。そんな双眸を平然と受け流し、ベラドナはゆったりと紅茶を飲んだ。

どんなに睨まれようが、彼女のあとを一生懸命くつついてきていた弟に変わりはない。

「どういふつもりですか。姉上」

余談を許さない詰問にも近い口調で、キールは重苦しく口を開いた。

「王子との婚約を放棄するなど」

「破棄よ。それにそれはもう終わった話だわ」

言い募ろうとする弟をベラドナはやんわりと、だが一刀両断する。情報が遅いわね。渉外担当が聞いてあきれるわ」

先手を打たれたキールはぐつと言葉に詰まる。が、彼もプロだ。これで押し黙るようなことはしなかった。

「今、王子との結婚を姉上が放棄するということは危険なのです」人払いした部屋に二人の他に人はない。

それに、この屋敷には身元の確かな数人の古参の使用人しかいない。

それでも人の気配がないことを確認してから、キールは低い声で続けた。

「隣国の動きが怪しいのです」

海と山に囲まれたローラン王国に、隣国は少ない。

ベラドナはカップをソーサーに戻して、その小さく揺らめく紅茶に視線を落とした。

ローランは交易の国として名高く、過去の戦争で負けた記録は少ない。それは戦争を事前に回避することが多いことと、交易で得た資金力と交渉能力で巧みに勝利を得てきたからだ。だが戦いの記憶は、平和な時代において過去の記録として久しい。

「……大地の国に、不穏な動きがあるようね」

隣国の一つ、山ばかりに囲まれている国土を持つ国がある。

ジーンランド。この国とローランは百年前に平和条約をもって以来、国交も問題はなかったはずだ。

ただ、ジーンランドという国は内陸国という土地柄、大なり小なり

り小競り合いが絶えない国でもあった。そんな国が適当な小競り合いを平定し始めたという。

友好国としてあるローランとしては、この動きを慎重に見極める必要がある。

平和的な外交に転換したのか。それとも、

「災いの可能性もあるのね」

大きな戦争の前触れか。

キールは湯気の薄れてきた紅茶を見つめ、ベラドナの言葉に続ける。

「西の大国の動きが活発なのです」

ジーンランドとは反対の隣国、モイラは大国だ。海と肥沃な大地に恵まれており、大陸においてこの国は誰も無視できない存在感を持つ。

平和はバランスだ。

大きな国も小さな国も、微妙な争いをこまめに解決していくことが求められている。ローランはその性格上、仲介役を買って出ているが、それゆえの問題もある。

「西では、若い王が即位したようね」

ラマンカ家の領地は多くあるが、西の大国モイラに近い。

それは昔、ラマンカ家がモイラと戦争をした際、領地を賜ったという経歴に基づいている。

「篡奪した、という話は本当なのかしら？」

大国ゆえの、斜陽に向かいつつあった王家にあつて、彗星のごとく現れた若い王。民意は掴んでいるようだが、老獪な、ともいわれるローランとしては、若い後継者はいささかやりにくい。

「噂の域を出ないところを見ると、話ほど馬鹿ではないようですが」
容赦のない言葉を零し、キールはようやく冷めた紅茶に口をつけた。

「大国は、大地の国に揺さ振りをかけているようです」

一部分だが大国と大地の国はローランを囲んで土地が接している。

その地域の小競り合いが近年活発になってきていた。しかし、ローランよりも広大とはいえジーンランドはモイラに比べて内陸の小国もし、ジーンランドがモイラの揺さぶりに堪えかねてローランをまず手中に収めようとすれば、良い意味で平和ボケしたローランとしてはたまらない。

「転換期。と、歴史家はまとめようとするでしょうね」

ベラドナは紅茶をサイドテーブルに置いて、その織指を膝に置く。窓の外を見遣れば、針葉の森が見渡す限り続いている。この地域で太陽を見ることは稀だ。ここに春の兆しは遠い。代わりに溜息を白くさせる冬の厳しさが残るようだ。

「新しい玩具を得た王がどう動くのか」

もしかすると、この慣れ親しんだ森が戦乱に焼かれる光景を目にする羽目になるかもしれない。

中央政治に慣れたラマンカ家で、はたして領民を守り切ることができるのだろうか。

「——だからこそ、姉上が王子の妃となるべきなのです」

氷の長官のまま、キールははつきりと呻いた。

「ただの町娘では立つこともできないでしょう。これからを」
これから。

ベラドナはキールの言葉を唇の中で繰り返した。

ベラドナは、家族にぬくぬくと守られて育った普通の良家の子女ではない。

父も母も、そしてキールも、その仕事の大半を自領から離れた王都でこなしている。

それは、王家にとってラマンカ家の立ち位置の重要性を表しているが、ラマンカ家にも治めるべき領地がある。

その一切を、キールが城勤めを始めてからベラドナが一人で取り仕切ってきた。

物心ついたところから領地を治めてきたベラドナの視点は、たおやかな美しい姿に反して辣腕をふるう領主そのものだ。

政治的な立ち回りの点を考慮すれば、彼女以上の妃候補はいない。
だが、それでは、

「甘えないで。キール」

はつきりとした声音に、キールはびくりと顔をこわばらせた。

表情などほとんどないといわれるキールのわずかな綻びに、針を
差し込むようにベラドナは淡い紫の瞳を細めた。

「私が妃となれば、あなたは仕事をしやすいのでしょうね」

気心が知れるという以前に、国勢を敏感に察知する妃が王の隣に
いるというのは、現状を考えれば、文官たちの安心感が違う。

だが、それでは駄目なのだ。

国を守るということは、

「あなたは領地を守るということが、どういことなのか、全くわ
かっていない」

国政を守ることだけでは務まらない。

国民を守ることだけでも務まらない。

キールは鼻白んで、しかし返す言葉が見つからないようで、彼の
青白くもある頬にうつすらと朱が浮いた。

ベラドナは、今までの功績から名実ともに女主人という地位にも
就ける立場にあるが、大貴族ゆえにその立場は弱い。

もしも、戦争が起こるようなときには、真っ先に敵国へと嫁がな
ければならない立場なのだ。

フレドリックの妹はまだ幼く、そしてベラドナは適齢期を幾らか
過ぎてはいるが美姫と名高い。どちらを欲するかは明白だった。

ベラドナは聡い弟に微笑みかける。

彼は、その立場から知り得たことを元に、本当にベラドナの身を
案じているのだ。

「ありがとう。キール」

優しい弟を見つめ、ベラドナは瞳を閉じた。

現状は芳しくない。

キールの退室した応接間でベラドナは空を見つめたまま、口火を切った。

「起こるのね。戦争は」

森の向こうへと沈む夕焼けが、ベラドナの影を長く伸ばしていく。その部屋の隅にくすぶる暗闇から「はい」と応えが返ってくる。

「東のジーンランド方面の山間部に斥候部隊を発見しました」

低く、くぐもっているが男ではない。女の声だ。

「開戦は、ベルランドね」

ローランとジーンランドの間に広がる平地だ。古戦場ということもあって、砦の跡と駐屯兵以外住む人はない。

山に囲まれた平地で、古くはローランとジーンランドが争った因縁の地でもある。

勝手知ったるとはこのことだが、ローランはジーンランドとは違い、ここ百年は大きな戦争を経験していない。

「アトロポス」

ベラドナが呼ぶと、声は小さく息を呑むのがわかった。しかし、それは数瞬で命令通りに暗闇から滑り出てきた。

頭からかけていた布を取り払って現れたのは、メイド姿の女だ。ベラドナと同じか少し年上か、小麦色に焼けた肌はこのローランでは珍しい。メイド姿であっても隙のない様子は野生の獣を思わせた。その眼光は鋭い。しかしその容貌は繊細そのもので、小奇麗にまとめた髪は、滑らかな雪のように白い。

無表情に白髪の女は、恭しくベラドナの前でひざまずいた。

「今から、あなたは私付きの使用人であり、騎士となりなさい」
弾かれるように、女は顔を上げた。

「ベラドナさま！」

悲鳴のように声を荒げる女を見つめ、ベラドナは微笑んだ。

「今日からあなたはアトロポスではなく、エメラルドと名乗りなさい」

エメラルドの瞳は、新緑のように明るいのだ。

「ごめんなさい、巻き込んで。けれど、他にあてがないのよ」

今まで、ベラドナにあらゆる情報を運んできていたのは、このエメラルドだ。

彼女の助けあってこそ、ベラドナは領主としてやってこれた。

本当は、一人では辛かった。

けれど、エメラルドが影で支えてくれたからこそ、ベラドナは華やかに歩くことができたのだ。

感謝こそすれ、今から彼女に命じることは幸せとは程遠い。

支配階級の者は、簡単に謝辞を示してはいけない。

だが、ベラドナは彼女に謝らずにはおれなかった。

ベラドナの一見明るい声を聞いて、表情など忘れていたようなエメラルドの顔が泣きそうに歪む。

「いいえ…いいえ…、姫の赴かれる場所ならば、たとえ地獄であろうとお供いたします」

優しい彼女ならば、そう言うてくれることが分かっていただけに、ベラドナは自分の罪を噛みしめた。

「あなたは、私の友人であり、ラマンカの領民であるのに、私のわがままに付き合わせることを、許して」

ベラドナは、長い漆黒の髪を背中に払った。

そして立ち上がる。

赤い夕日の残像を、暗い夜が覆い尽くそうとしている。

「忙しくなるわ」

喰われてなるものか。

きつと、最善の結果を掴み取ってみせる。

ベラドナは、淡い紫の瞳に強い光を宿した。

4 ベラドナと王子

ラマンカの領地から王都に着くころには、国中が開戦の困惑に浮足立っていた。

どこことなく不安そうな行き交う人々の表情を馬車から見下ろしながら、ベラドナは城へと入った。

エメラルドが子飼いの情報屋から仕入れた情報によると、内陸向けの交易ルートはすでにジーンランドによって封鎖されているようだ。

向こうの方が、一步も二歩も手回しがいい。

ベラドナは会議中だというフレドリックを待つて、彼の執務室横の部屋へと通された。

案内してきたメイドは不審気にベラドナを観察していたが、やがて茶の用意にと部屋を去った。

ベラドナはメイドの態度に大きく安堵した。

元婚約者が出入りすることをよく思わない者が居るということとは、マーガレットが城内でそれなりに信頼を得てきているということだ。頭の固い文官や武官は難しいだろうが、数だけならどの階級より多い使用人たちの支持を得られているのなら、このさき心強い。

しばらく沈黙のまま、ベラドナは窓の外を見つめた。

エメラルドには情報を集めてもらうために出払ってもらっている。どういふ結果が来ようとも、受け止めるだけの心を持つとう。

苦しいほどの不安は、今は忘れることにした。

窓の外の青い空の下で庭園の花が咲いている。

色とりどりの花が、春を讃美するようだ。

ベラドナの生まれ故郷であるラマンカの春は、もう少し趣が違う。

針葉の森の新緑はほとんど色もわからないうえ、春の季節になると一斉に葉を枯らし始めるのだ。その秋のような森の中で、苔むした岩肌の間から小さな花が咲く。

ベラドナは、華やかな花よりも、その小さな白い花が好きだった。冷たい森には、大きな狼が住み、人間たちから森を守っている。ラマンカ家の祖先はその狼たちとの絶妙な住み分けに成功し、城下に広大な森を治めた。

一度だけ、ベラドナはその狼と出会ったことがある。

幼い頃だ。

まだ弟は彼女以上に幼く、両親は王都に出かけて居ない。

一人で遊ぶことの多かった彼女は興味本位で森の深くに入ってしまった。

道を探すうちに日は傾き、森をさまよううちに一匹の狼と出会ったのだ。

恐怖と疲労で叫ぶこともできなかった。

だが、灰色の毛並みの狼はじっとベラドナを見つめると、ふいと体をそらした。

大きな体だ。

幼い子供であれば、人間であろうと簡単に食らうだろう。

しかし、歩き出したその尻尾を見つめて、ベラドナは誘い出されるように狼について歩き出した。

そうして気がつけば、ベラドナは自分の屋敷へと辿り着いていた。探していたらしい乳母に泣きつかれながら、ベラドナは思った。きっと、ベラドナは認められたのだ。

この森と、生きる者として。

それまで、本当の意味で他人に認められることなど無かったベラ

ドナは、感動にも似た心地で小さな胸の中で誓った。
きつと、この森を守ってみせる。
今も、その小さな誓いは胸にある。

だが、それも、きつと果たせない。

扉の開く音ともに、ベラドナは椅子を立った。

「お待ち申しあげておりました。殿下」

固くぎこちないフレドリックに、ベラドナは朗らかに微笑む。

彼の側には、護衛官のトトメスと外交長官のキール、そしてマーガレットが連れ添っていた。

メイドに人払いを命じ、扉を閉めさせると、フレドリックは重苦しい顔でベラドナと対面してそれぞれ椅子に腰掛ける。マーガレットはフレドリックの隣に、キールとトトメスは彼らの背後に立った。うつむき加減のフレドリックの隣で、不安気なマーガレットがベラドナとフレドリックに視線を迷わせている。

「手短かに申し上げますわ」

ベラドナは、先手を打つことにした。

あまりうまい切り出しではない。

自覚はしていたが、早く終わらせてやるのが幼馴染への気遣いだ。

「わたくしを、戦場へお遣わしてください」

フレドリックとマーガレットが目を丸くした。

問われる前に、ベラドナは続ける。

「戦争は、避けられせんわ。ですから」

「そんなのおかしい！」

ベラドナの言葉に固まるフレドリックとは裏腹に、マーガレットは席を立ってベラドナの肩をつかんだ。

「どうしてベラドナ様が戦場へ行かなくてはならないんですか！」
素直な娘だ。

きつと、フレドリックはそんな彼女を愛しいと思ったのだ。

ベラドナも、数回ドレスの作り方を教わっただけだが、マーガレットを好ましく思っているし、愛しさもある。だが、
「では、あなたが代わりに行ってくださるのかしら」

素直なだけでは駄目だ。

微笑みさえ湛えながらベラドナが静かにマーガレットを見遣ると、彼女の丸い瞳に脅えが見えた。

ぱん！

甲高く音を立てて、わざとらしくマーガレットの手を肩から払う。叩き落とされた手を少女は痛そうに見つめ、涙を落としそうになっている。

そのあかぎれの目立つ小さな手は、働き者の美しい手だ。

「余計な口出しは無用に願いますわ。妃殿下」

ベラドナとマーガレットは、そう年が違っただけではない。
しかし、ベラドナの経験とマーガレットの育ちでは雲泥の差がある。

まだ年若いマーガレットには、何かを背負うという気概は備わっていないのだ。

マーガレットは負けん気の強い瞳でベラドナを見つめてくるが、痛くもかゆくもない。

今、彼女を甘やかすわけにはいかない。

「——いかがでしょうか。フレドリック殿下」

フレドリックに視線を戻すと、彼もまた、固い表情でベラドナを見つめていた。

「……お前を、死なせるわけにはいかない」

低く、フレドリックは呟く。

ベラドナは綻びそうになる心を、目を細めてこらえた。

嘘でもいい。

打算でもいい。

その言葉を聞けて、良かった。
たった一言で満たされる。

その心に、名前をつけることすらしなかったけれど。
ベラドナは深くうなずいた。

「死ぬつもりはございません」

この場において、静かな湖面のようなベラドナの声はよく響いた。
御前会議の結果は、予想がついている。

ベラドナを敵国へ差し出す。

キールがこの場にいることで分かった。

彼がラマンカの領地を引き継ぐ後継に、正式に決まったのだ。

そつと横目で弟を見ると、氷の長官には似つかわしくない苦り切った顔をしている。

しっかりしなさい。

そう叱咤するように、ベラドナは艶然と微笑んだ。

「自分の結婚相手の顔ぐらいいは知っておきたいと思ったままですわ」

ローランはジーンランドに向けて交渉を試みたが、数日後の返答は、否。

ベラドナの予想通り、戦場はベルランドとなった。

エメラルドの帰還で、ベラドナはまだ見ぬ結婚相手の名を知る。

アフエル・ジーンランド。

ジーンランド公国第一王位継承者であり、幾多の小競り合いを収めてきた勇猛で名高い将軍であるという。

名を、鮮血の公子。

今回の戦争の、敵国の総司令官である。

5 ベラドナナの決意

開戦の準備はおおむね順調に進んだ。

ベラドナナの両親は反対し続けたが、娘の頑固さを承知していて、最後の最後でうなずいた。

「生きて帰るのだぞ」

泣きやまない母を支えながら、体面ばかり気にしている父がそんなことを、背中と言った。

「お母様とお父様のことを頼んだわよ」

ここ数日、ベラドナに付いて準備に付き合っていたキールは顔を上げた。

ベラドナに与えられた一室には、深窓の姫には似合わない無骨な鎧や剣のたぐいが並んでいる。

今は、予備食を入れた革袋を一つずつ装備にくくりつけていた。

まさか戦場まで馬車というわけにはいかない。ベラドナは一軍の将と同じく、軍馬が与えられた。馬の鞍の横に簡単な身の回りの品を乗せるのだ。

水に食糧、簡単な薬品類に小剣、簡素な着替え。ベラドナが身を整える品は革ひも一つが精一杯だった。

ベラドナナの部屋には、誰もが羨むような宝石もあったし、職人が丹精を込めて作りあげた絹のドレスが一生かかっても着られないほど用意してあった。

だが、ベラドナはお気に入りのドレス一つ荷物に積み込んでいない。

「……死に行くおつもりならば、どんな手を使ってもお止めいたしますよ。姉上」

ベラドナは鞍にくくりつける皮紐を確認していた手を止めて、目

の前でうなだれる弟の肩を抱いてやった。

「手紙を書くわ。きつと」

そういえば、小さな頃から寂しがり屋の弟だった。

今ではすっかり城勤めの文官として務めていたから、忘れていた。ベラドナは荷物の中に、小さな便せんと筆記具を入れることにした。

出立当日までフレドリック達と顔を合わせる機会はなかった。

王と王妃に型どおりの挨拶をして、広間を出るとベラドナと同じように鎧に身を包んだトトメスが待っていた。

訝るベラドナにトトメスは口の端を上げる。

「今日からお前の護衛官だ」

それから、と二の句を継げないベラドナにトトメスは外套を手渡した。

華美ではないが、上質な布で作られた黒の外套は丈夫そうだ。

「マーガレット様から」

謝らない。

そう決めていた。

けれど、瞳の端が滲んだのを、トトメスは見ないふりをしてくれた。

ラッパが高らかに鳴り出すのを待って、ベラドナとローラン軍は王都を出立した。

6 ベラドナノ真価

王都から戦場のベルランドまで、三日の行程があった。その間、山麓を繋ぐ森で野営しながら行軍する。

すでに孫もいる禿髪の老将は、白い髭を蓄えた巖のような顔でベラドナを一瞥した。いくつかの戦歴を持つことで総司令官に抜擢されたドードー將軍だ。

「姫君が、軍馬を扱えるとは思いませんでしたぞ」

第一騎士団の団長も兼務するドードーは、興味深そうに破顔する。他の師団長たちも同様だったようで、ベラドナは野営地に造られた簡易作戦室の注目を浴びた。

三日目の行軍を無事に終え、最後の野営を迎えようとしている。ベラドナに部隊はない。

王とドードー將軍は小隊をつけると申し出てくれたが、ベラドナは結局ドードー將軍の指揮する第一師団の一将という立場で作戦室入りすることになった。

表向きはベラドナの補佐ということで第一騎士団のトトメスも作戦室に居る。

「馬には、幼い頃から親しんでおりましたので」

男の幼馴染と付き合い合うというのは、なかなか大変だった。

乗馬の練習を始めたフレドリックとトトメスについて、ベラドナも訓練を受けたのだ。

初めこそ講師に嫌な顔をされたが、しつこく行くうちに怪我をされてはたまらないと思ったのだろう。二人と共にベラドナも馬の世話をするようになった。

領地で暮らすようになってからも乗馬はベラドナの趣味の一環で、キールに乗馬の手ほどきをしたのはベラドナだ。

フレドリックとトトメスと一緒に受けた講義は乗馬だけではない。帝王学、兵法、果ては剣術の手ほどきも受けた。領主代行の経験もあって、男の中での女の独立した立ち回り方も心得ていたが、実際の戦場へ出るのは、初めてだ。

ベラドナは、自分に出来ることは全てやった。

他の兵卒と同じように食事の準備をし、同じように馬の世話をした。作戦室に出入りを認められてはいるものの、今のように求められない限り極力発言は控えた。

粗末な食事と、テントを与えられてはいるが固い寝床には驚いた。水も持ち運べる量は飲み水だけだ。手入れのしていない長い髪をエメラルドは惜しんだが、ベラドナは気にしないことにした。化粧道具は一つも持ち込んでいない。

この男だらけの軍の中で鏡などないが、化粧のしていないベラドナは持ち前の長身も手伝って、髪を簡単にまとめた姿は一見すると初陣の若武者にも見えた。

初日はベラドナを気遣う者が多く居たが、彼女の姿勢を見止めた兵士たちはすでにベラドナを姫としては扱わなくなっている。

新参のベラドナに話を振ってから、ドードー將軍は明日の開戦に向けての詳細を語り出した。

ベラドナは、將軍たちの緊張を静かに見守った。

騎兵を五百、歩兵は三百従えた三つの師団からなるローラン軍は、翌朝ベルランド平地に展開する。

今回の野営地は平地のすぐ側だ。夜のうちに軍備を整え、夜明けと共に平野を騎馬で埋める。

歩兵よりも騎馬隊が多いのは、師団編成の半数近くが騎士だからだ。

ローランは、小さい国ながら五つの騎士団を持つ。潤沢な資金力で育て上げられた騎士団だが、実践は少ない。

戦場は平地。

騎馬は確かに有利に働くが、ジーンランドの兵力には及ばない。少数精鋭を目的に、騎士団から師団を編成したのは、ローランの苦肉の策だった。

西の大国、モイラの動きを見極めるためにも、騎士団全てを送り出すわけにはいかないのだ。

総力戦にはできない。だが、総力戦に近い武力を投入しなくてはならない。

ドードー將軍の固い面持ちからは、苦渋の選択結果なのだと伝わってきた。

ベラドナの配置は第一師団の中央、將軍のすぐそばと決まった。

作戦会議に解散を告げてから、ドードーはベラドナを呼びとめた。

「本当に戦場へ行かれるおつもりか」

女性としては長身のベラドナよりも更に大きな老将を見上げ、ベラドナは微笑みを向けた。

「將軍におかれましては、わたくしのわがままにお付き合いいただいて、申し訳なく思っておりますわ」

「私は、そうは思っておりません」

ドードー將軍は、はっきりとした低い声で断言した。

自軍のテントに戻りかけていた將軍たちが足を止める。

「姫、あなたのお覚悟のほどは、このドードー、理解しているつもりでございます。しかし、あなたの細腕ですべてを購いきれるほど、戦は容易くございません」

ドードーの眼光が、ベラドナを射抜く。

しとやかな姫の仮面を、悲劇的な姫を装う先を、見透かされている気がした。

本心など見せぬまま、大人しく死ぬつもりか。

將軍の目はベラドナに問う。

「ドードー將軍」

所詮、ベラドナは毒の花。

清らやかに、美しくは生きられないのだ。

「このわたくしが、最善の結果をご覧にいきますわ」

ベラドンナの名に相応しい、猛毒の結果を。

トトメスを伴って自分のテントへと戻ると、ベラドナと同じような鎧を身につけたエメラルドがすでに控えている。

トトメスとは初めて顔を合わせるからか、彼は不審気に眉根を寄せた。ベラドナは説明をしないまま、テントの隅でひざまずいているエメラルドに顔を向ける。

「エメラルド。報告してちょうだい」

「はい」

エメラルドはこうべを垂れたまま、平坦な声で続けた。

「ドードー將軍の放った斥候部隊の幾つかが、既にジーンランドの部隊と鉢合わせしているようです。あちらの斥候もベルランド近辺の森のあちこちに散らばっています」

「そう」

ベラドナはベルランドの地図を頭の中に描きながら、エメラルドの報告を照らし合わせていく。

ベルランドは両脇に山麓を抱えた平地だ。その森は深く、騎馬は通りにくいとされている。

「ドナ。この女は」

ベラドナの隣で黙っていたトトメスが顎でエメラルドを指す。トトメス是不愉快そうだが、エメラルドに気にした様子はない。

「私の騎士よ。情報を集めてもらっていたの」

「……お前、影まで飼っていたのか」

主に情報収集や暗殺を仕事とする者を影と呼ぶことがある。それは、エメラルドのような異民族に多いが、ベラドナはエメラルドの

存在を家族どころかトトメス達にも話したことはなかった。

ベラドナがエメラルドを見遣るが、彼女は少し視線を上げるだけだった。

「何年か前に、私の領地で倒れていたところを助けたの。あとは知らないわ。彼女は私の騎士であり、私の大切な友人」

きつと、どこかの裏稼業の集団に所属していたのは間違いない。

だが、ベラドナはそれを積極的に調べようとはしなかったし、エメラルドはベラドナを裏切ったことはない。

トトメスはいまだ信じられないような顔でエメラルドを見ていたが、顔色一つ変えない彼女から視線を逸らして、ベラドナに向きなおる。

「で、ドードー將軍に啖呵切った手前、どうするつもりだ？」

トトメスも友人だが、彼も今、ベラドナの部下でもある。

彼の答えに満足したベラドナはエメラルドとトトメスを見渡した。

「明日のお楽しみよ」

7 ベラドナの出陣

戦場の朝は、早い。

朝もやに覆われた下草は露に濡れている。

夜明けの肌寒さが、緊張を含んで怪物のようにベルランドの平地に落ちてくる。

しびれるような感覚をおぼえながら、ベラドナは軍馬をなだめるように首を撫でた。

馬も、人も、破裂する寸前の静けさで、爆発の時を待っている。

かつ、とドードー将軍が馬を単騎で進めた。

生まれたばかりの強烈な朝日を和らげる朝霧の向こうでも、一騎のひづめの音が響く。

ドードー将軍の大きな背中を見つめながら、将軍越しに現われてきた黒い鎧にベラドナは目を凝らした。

艶消しの鎧は陽光を吸収して鈍く揺らめいて見えた。将軍と違い、すでに兜を身に着けていて、顔は分からない。軍馬にまたがる姿は遠乗りに出かけるように悠然としているが、将軍のように巖のような大男ではない。だが、長い手足にはしなやかな臂力が見て取れた。鞍の両脇に、愛用らしい黒の長剣が二振り。

ベラドナは我知らず息を呑む。

彼だ。

鮮血の貴公子。

アフエル・ジーンランド。

禍々しささえ漂う騎士は、馬二つ分ほどの距離を残してドードー将軍と向かい合った。

ベラドナの場所からは将軍たちの声は聞こえない。

しかし、彼らは一言二言交わし、互いに馬首を反転させた。

朝もやが次第に薄れていく。

黒騎士の背中の方こうから、ジーンランドの陣営があらわになっていく。

くろがねの揃いの重厚な鎧。手に持つのは長槍。小さな子供一人分はあろうかという装備で微動だにしない騎馬隊がローラン軍の目の前に広がっていく。

優雅さの欠片もない騎馬が城壁のように並んだ。振り返ったドードー將軍が愛用の大剣を抜いた。

黒騎士も遠くで双剣を構えている。

ローラン軍とジーンランド軍の距離は、一個大隊ほど。

「かれ！」

野太い大音声の次に、荒波のようなときの声が唸りを上げた。

一斉に飛び出していく騎馬隊と歩兵。

代わって、ジーンランドは騎馬隊のみだ。

ベラドナは飛び出さず、騎乗しているトトメスと徒歩のエメラルドと共に下がり、やがて前衛から下がってきたドードー將軍と共に、近衛兵と本営まで下がった。

少し小高い丘の上に、ローランの陣営は小さな森を背にしている。山麓沿いに険しい絶壁がある場所もあったが、將軍はあえて小さなこの森を選んだ。

ベラドナはドードー將軍の隣でぶつかり合う馬と人が乱れ交じるのを横目で見た。

この時点で勢いは互角。

だが、將軍の表情は硬い。

ジーンランドの兵力は、ローランのほぼ倍ある。

ローランのほぼ全軍の相手をしているのは、彼らの三分の二ほどだ。

あの、黒騎士が帰っていった精鋭であろう騎馬部隊はほとんど動いていない。

「將軍」

ベラドナは素早く頭を巡らせた。

「わたくしに、騎士をいただけませんか」

ドードー將軍の周囲で攻勢を見守っていた將軍たちが驚いたように振り返る。

ベラドナは構わず続けた。

「弓隊を二人、騎馬を五人、いえ三人でもよろしいわ。なるべく足の速い者を」

今、この場にいるのはほとんどが近衛か第一師団の精鋭ばかりだ。その中から人員を裂こうというのか。

非難めいた視線が彷徨う中で、ドードー將軍はベラドナを見据え、そして大声を張り上げた。

「タイラー！ ファーガン！ エルガ分隊はベラドナ様の指示に従え！」

命令を下されて、彼らが集まるのは早かった。総勢十二人。

ベラドナはざっと分隊の顔ぶれを確認し、將軍に向きなあった。

「ありがとうございます」

「いかがされるおつもりですか」

將軍は本営の遠くを見つめたまま表情は厳しい。

「一時、稼いでくださいませ。わたくしが狼煙を上げます」

「いずこから」

「あちらから」

ベラドナの細い指先が指したのは、將軍が見つめていた黒い壁、ジーンランドの本営である。

彼らは広い森を背に静かに出番を待っている。

「婚約者の顔を暴いてまいります」

化粧もない、飾る宝石もない、美しいドレスもない。そんな戦場であって、ベラドナは大輪の花の如く艶然と微笑んだ。

「はははははははははは！」

ドードー將軍の哄笑に多くの兵士たちが目を丸くする。

「よし分かった！」

將軍は人の悪い笑みでベラドナを一睨みすると、啞然とする將軍たちに向かって大音声を上げる。

「毒を食らわば皿まで！ 我々はベラドンナの姫君の露払いをして進ぜよう！ エルガ！」

「は！」

呼ばれた騎士がドードー將軍にこうべを垂れた。

「姫君をしっかりと守りせよ！」

「は！」

焦げ茶の髪の騎士はそう返答すると、ベラドナに再度ひざまずく。

「ご命令を」

三十路をいくらか過ぎたほどだろうか。

この頭の良さからして、きっと、將軍の腹心だ。

ベラドナは將軍に心の中で最大限の感謝をして、顔を上げた。

「わたくしについてきてください」

ベラドナは十騎あまりを連れて、本営を飛び出した。

8 ベラドナ、疾走

本営横の森は鬱蒼とした針葉樹が広がっている。

ひとつ間違えれば枝にぶつかり落馬する危険もある森を、ベラドナを先頭にして疾走する。

本来なら馬が通れるはずのない道だ。

ベラドナがエメラルドに調べさせた、ジーンランドの斥候部隊が使っていた道である。

この道は、ローランの不意をつけるようにもなっているが、逆に言えば本営までの一番の近道だ。

危険な道ではあった。

だが、ベラドナはどんな手段でも使うと決めていた。

しばらくすると、ひゅんと風を切る音と共に弓が降ってくる。

ベラドナは馬を駆けさせたまま、騎士たちに進めと手で合図を送った。

弓兵を見つけた騎士が射落とす。

騎馬が二騎、木陰から踊りでてベラドナに向かって槍を振りかざす。

だが、疾風のように小剣が騎士の喉元を食い破る。

エメラルドだ。

彼女もベラドナと同じく軍馬を走らせているが、その装備は軽装だ。なめした皮の防具を腰と胸、腕に金属の籠手をつけただけで、あとは兵士の平服と変わらないがその軽装だけに、彼女は馬上でも魔法のように短剣を投げ、馬の目を潰す。

ベラドナは馬から落ちた騎士に目もくれず、走り抜ける。

山道は緩やかな坂道で、ベラドナ達はちょうど坂をくだるようにして駆けている。

次々と敵兵は多くなる。

トトメスが長剣で槍を弾く。

鎧を着ているとは思えないほどの素早さで槍を奪ったかと思うと、相手の騎士の馬首に突き刺す。

一瞬、無防備になったベラドナを狙って別の騎士が咆哮を上げた。だが、ベラドナは冷静に自分の剣を抜いて、迷わず振るう。

一閃。

鎧の付け根、肩口を切り裂く。

ベラドナの腕前では腕が落ちるほどではないが、それでも騎士は堪らず馬から落ちた。

生死は確認しない。

ただひたすら前へ。

はぐれた者はすぐに引き返せと指示を出しているが、誰も逃げ帰ろうとはしなかった。

一人はベラドナの盾となり、一人は後続の敵と相対し、欠けていく騎士たちの顔をベラドナは憶えている。

これが、ベラドナの選んだ道なのか。

生臭い血と、跳ね上がる泥。

全身が痺れるようで、けれど止まらない。

吐く息以外の言葉はなかった。

ただ斬り、ただ奔る。

速く。

早く。

疾く。

それ以外、ベラドナは考えなかった。

鍛えられた軍馬が泡を吹く、その寸前まで走らせて、ようやく森を抜けた。

エメラルドの地図通りの、ジーンランドの本営が目の前だ。

ド
ド
ド
ド
ド
！

ベラドナが黒い陣を見つけると同時に、騎馬隊の地鳴りがする。まさかと思つたが、味方の騎兵が見えた。

遠くでは未だ乱戦が続く中を、小隊が一本の槍のように突破してきたのだ。

騎馬は貴重な戦力なうえ、ローランの戦力自体少ないというのに、囲まれれば、即全滅の危険な攻めだ。

（将軍！）

これは、ドードー将軍の非常に危険な賭けだ。

そして、将軍はベラドナの奇襲に賛同を示してくれた。

ベラドナは熱に浮かされたように、混乱した戦場を走り抜ける。

ようやくベラドナ達に気がついた兵が一斉に槍を向ける。

「行ってください！」

こんな時でも丁寧なエルガが、既に兜のない血濡れた顔をベラドナに向けて叫んだ。

「ご武運を！」

ファীগンが既に矢の切れた弓で敵兵を殴りつける。

タイラーは何も言わずにベラドナを狙っていた槍兵へと小剣で斬りつける。

ベラドナは走った。

本営は近い。

近衛兵の重い鎧の隙間を、エメラルドの小剣は縫うように突き刺した。

トトメスは近衛隊長の首へと、奪った長剣を投げつける。
ベラドナの外套に弓が突き刺さる。

咄嗟に近くの兵へと黒い外套を投げつけ、剣を突き立てる。

（ああ、ありがとう。マーガレット）

ベラドナが無傷だと確認したエメラルドが自分の小剣を見張り台でこちらを狙っていた弓兵へと投げた。

「行け！」

トトメスが怒鳴った。

ずたずたになっている籠手で、ベラドナに向かってきた槍を受け止めたのだ。

走れ。

ベラドナは震える自分の足を叱咤した。

追いつがろうとする敵将を振りきり、陣営の最奥。

地図の広げられた机の向こうで、黒い鎧を見つけた。

あれだ。

長い手足、背は思ったよりも高い。

荒い呼吸を一瞬だけ整えた。

驚いたように振り返るその一瞬だけが、ベラドナに許された隙だ。

長い双剣を彼が手に取る前に。

ベラドナはすでに切れ味の鈍った剣を払うように振りかざす。
顔を覆っていた騎士の兜が飛んだ。

赤い。

眼の眩むような紅。

焼け焦げたような深い茶色の髪、驚きに見開かれているのが、まるで宝石のような赤い双眸。

ベラドナは息を呑んだ。

だが、頭の冷静な部分で男の胸倉を掴んで押し倒していた。

二人して地面へと倒れこむ。

男が小剣を取り出す前に、広い胸に膝を押し当てて、剣先を喉元に突きつける。

切れ味は鈍いが、突き刺すことは容易だ。

がらん、と遠くで乾いた音が鳴る。

ばさりと散らばったのは、きつと自分の髪だろう。

「殿下！」

血相を変えた兵士が走りこんでくる。

背後から突き出された剣を、ベラドナは奇跡的に避けることが出来た。

我ながら悪運が強い。

しかし、これでは、この目の前の男が体勢を立て直すのが早いのか、兵士にベラドナが殺されるのが早いのか。

ベラドナは鋭い切れ味の剣で裂かれた髪の一房を見捨てるように目で追い、そして男の喉元に当てていた剣を自分の元へと引き寄せる。

分が悪い。

机の下にでも転がりこもうとしたが、その腕を押し倒していた男に取られた。

ぐっと掴まれたかと思うと、ベラドナの背後から剣を振りおろそうとしていた兵士の剣を恐ろしい速さでベラドナの剣で受け止めた。

ガキン！

兵士の剣を受け止めると、ベラドナの剣はあっけなく折れた。

転がった切っ先を半ば呆然とベラドナは見遣った。

自分で柄を放さなかったのは偶然だ。ベラドナの右手は剣を握ったままで手の感覚がない。

思いのほか近くで溜息が聞こえた。

ベラドナを膝に乗せたまま、黒い鎧の男は地面に溜息を零して顔を歪めている。

不思議に思っただけで男の視線を追うと、地面には先ほど切り落とされたベラドナの髪の毛が散らばっているだけだった。

それを、目の前の男は、自分の利き腕でももがれたかのように、苦しいのか痛いのかもわからない痛切な顔で見下ろしている。

妙な男だ。

自分を殺そうとした女の髪が一房切り取られただけで、どうしてそれほど痛ましい顔をするのか。

ふと、凝視していたベラドナに男が顔を上げた。

やはり、若い。

厳つい鎧に反して、面相は精悍というには程遠かった。

年は、ベラドナよりも幾つか上というところだ。

目鼻立ちは整っているが、眼鏡をかければ、まるで学者のようでもある、穏やかな顔をしていれば近所の子供たちに教鞭でも垂れているような、そういう、戦場には似合わない容貌だ。普通に対面し

ていれば、どうしてこんな男が、と思ったことだろう。

男は微笑んではないが、どこか優しい顔でベラドンナを見つめ、

「あなたが、ローランの魔女、ベラドンナ？」

9 ベラドナナの失敗

「あなたが、ローランの魔女、ベラドナナ？」

耳に暖かい、低い声だ。

ベラドナはいつの間にかじかんでいた手に、わずかな体温が戻ってくるような心地がした。

淡い紫の瞳でベラドナは改めて男を見つめる。

紅い瞳に薄汚れたベラドナが映っている。

どうして、この男は目の前の薄汚れた女兵士がベラドナだと分かったのだろうか。

頭の隅で不思議に思いながらも、ベラドナも静かに告げた。

「あなたがジーンランドの鮮血の公子、アフエル・ジーンランド殿ですね」

男、アフエルはうなずく代わりに、赤い目を細めた。

良かった。

思いのほかはつきりとした自分の声に、ベラドナは安堵した。

「ローランは停戦を求めます。承諾していただけますね」

アフエルは少し目を見開いた。

この、敵の指揮官に剣を突き付けた状況で、停戦を口にしたことに驚いたのだろうか。

ベラドナは、元よりそのつもりだったのだ。

降伏はしない。

不利な条件など呑むものか。

公正な停戦条約を結ぶために、ベラドナはあれほどの無理を通した。

すべてはローランのために。

「停戦の約束に、わたくし、ベラドナ・ディ・ラマンカの身を貴国に捧げます」

まっすぐなベラドナの視線から外れようとせず、アフエルは何も答えない。そのまま、そろりとした手つきでベラドナの乱れた髪に触れた。

切り落とされた髪のを掌に乗せる。

まるで壊れ物を扱うような仕草に、切れた髪のことなどすっかり頭になかったベラドナの方が訝る。

髪のをじつと紅い目が見つめていたかと思うと、アフエルはベラドナの肩を掴んで、驚くほど透る声を張り上げた。

「停戦の申し出を受ける！ 即刻、戦闘中止！」

近くでこちらの様子をうかがっていたのだろう。

敵将たちが慌ただしく陣営を出ていく。

やがて、そう時もたたないうちに、停戦の銅鑼が鳴り響いた。

あちこちで湧きあがる歓声とも叫喚ともつかない声が銅鑼の音を掻き消すかのように幾重にも続く。

ぽつんと取り残されたベラドナは、ようやく息をついた。

「立てるか」

予想外に近くでささやかれ、ベラドナは自分の状態を思い出した。思えば、ベラドナはずっと、アフエル公子の膝にまたがったままだったのだ。

妙な気恥ずかしさと共に、立ち上がるうとして、ベラドナは異変をようやく理解した。

腰が抜けている。

足に力を入れようとしても、全くいうことを聞かないのだ。考えなくとも理由はわかっている。

ベラドナは、どんなに思い切りのいい決断力と勇気を持っていて

も、所詮は初陣なのだ。

今更ながら腹の底から震えが湧いてくる。

息が荒くなる。

目の焦点が怪しくなる。

どうしようもない戦慄きが、恐怖だとベラドナは分かった。

今日一日で、いったい幾つの命を奪ったのだろう。

ベラドナは記憶にある限りの数を数えてしまいそうになる。

だめだ。

そんなことをしては、ベラドナは、きつともう正気ではいられない。

ベラドナが自分で動けないことが分かったのだろう。

アフエルはベラドナを自分の膝から降ろした。

そのまま陣営を出ていくのかと思えば、アフエルは何を思ったのかベラドナを自分の膝の間に座らせて、そのまま子供をあやすように抱き締めた。

堅く冷たい鎧の奥から、ベラドナと同じ音が聞こえてくる。

心臓の音だ。

規則正しい命の音。

死んだ命と、生き残った命。

ベラドナは、罪を抱えて生きる道を選んだのだ。

それは、きつと、間違っていない。

次第にベラドナの吐息は穏やかになった。

それはベラドナが精神を整えようと気力を振り絞っていたからでもあったし、ただ無心に彼女を抱えてくれている腕のお陰でもあった。

包み込まれるような安心に、ベラドナは戸惑った。

「……リリーを思い出すな」

懐かしむようにアフエルはベラドナを柔らかく抱き締めたまま呟いた。

「……リリー？」

それは女の名だ。ベラドナは複雑な気分になった。だが、公子は平然と答えた。

「昔飼っていた捨て犬だ」

自分を過大評価するわけでもないが、仮にも傾国の美女と呼ばれるベラドナを抱いて犬を思い出すとは。

気が抜けるような、腹立たしいような気分をベラドナは怯えていたはずの腹の底に押しとどめた。

「怯えていた彼女をこうやって抱きしめてやると、落ち着いたものでね」

ベラドナは手入れのしていない髪を撫でられて、どうしていいのかわからずそのまま、じっとしていることにした。

「殿下！」

本営に一人の兵士が飛び込んできた。外套を身につけているところを見ると、士官クラスなのだろう。

が、総司令官であるはずの公子が敵国の姫であるベラドナをあやしている姿を見つけて、一瞬固まった。

「どうした」

アフエルは実にあっさりとベラドナを手放した。

重そうな鎧のくせにどうしてそれほど軽々しく動けるのかと思うほど、素早く立ち上がると、兵士の報告をうながす。

どうやら本隊が引き戻り始め、主だった將軍たちが陣営に戻りつつあるようだ。

ベラドナは自分の震えや怯えが不思議と治まっていることを確認した。

立たなければ、と思ったところで兵士と目が合った。

「殿下。この御方は……」

「ああ」と、アフエル公子も地面に座り込んだままのベラドナを見下ろす。

「ベラドナ・ディ・ラマンカ姫だ。彼女が停戦を申し出た」

公子がベラドナを紹介すると、兵士はようやくギョツと身を引いた。

それはそうだ。

重さはまるで違うが將軍と同じような甲冑を身につけ、泥と血にまみれた姫がどこにいる。

一目でベラドナと分かったアフエルは、やはりおかしいのだ。

「で、ではこの御方が、魔女ベラドンナ！」

どういふ噂が飛び交っているのだろうか。

箒を持たされて飛んでみると言われたら、どうしたものか。

ベラドナはのんきにそんなことを考えながら、立ち上がる。

「どうして、このような場所に魔女が！」

「噂通りの、美しい御方だな」

慌てた様子の兵士に、総司令官はのほほんと答えた。

「停戦の約束に、御身を我が国に預けてくださるそうだ」

「ええっ」

兵士は驚きとも歓喜ともつかない声を上げた。

どちらかというと、戸惑いの度合が大きい。

一瞬、憐れそうにベラドナを見遣ったが、すぐに兵士は視線をそらした。

何か、あるのか。

「い、いかなさるおつもりですか！」

ベラドナの疑いの視線が痛いのだろう。兵士は一際大きな声で公子に応えを求めた。

一方、公子の方はのんびりと顎に指をあてて、すんなりと答えた。

「母上に御采配を仰ごう」

ベラドナは、一瞬、ジーンランドはそんなに妃の力が強かったかと自分の頭の中を探った。

しかし、どう思い出してもジーンランドの現妃が特別強い権力を持っているという情報はない。

訝るベラドナをよそに、アフェルは和やかに続ける。

「母上ならば、良い御采配をしてくださるだろう。母上は素晴らしい御方だから」

公子の応えを聞いた兵士の顔が盛大にひきつっている。

この馬鹿公子。

そんな罵声も聞こえてきそうだ。

まさか。

ベラドナはアフェルの顔を再び睨んだ。

学者然とした面構え、母上と呼ぶ顔のなんと締めりのないことか。

これが、噂に聞く、マザコンという生き物……っ！

いつかの晩餐会で、耳年増の令嬢たちがまことしやかに囁いていた。

結婚相手としてまず厄介な男が、何でも母親に相談せずにはいない男だと。

男という生き物は大なり小なり、母親が大好きなものだが、度を超す輩が時折存在するという。

それが、マザーコンプレックス。略してマザコンという生き物。まさか、自分の目の前にそんな男が立っていたいようとは。

戦場では颯爽としていた黒騎士が幻に見えてきた。もしか双子がいるのでは。だが、ベラドナの勘は、アフェル・ジーンランド本人だと告げている。

（嘘だと誰か言って！）

ベラドナは心の中で絶叫した。

（私は、なんて、早まったことをしてしまったの！）

人生最大の過ち。

ベラドナ・ディ・ラマンカ姫は、後にもそう語った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8106k/>

ベラドンナの憂鬱

2010年10月8日12時45分発行